

ば、誇張・言葉の列挙・縁語・雅語・俗語の使用・諺のアレンジ等である。これらを駆使して、構成の奇抜さ、ストーリーの展開のおもしろさ、土地柄による町人氣質の紹介、実在の人物を登場させ真实性と親近感を感じさせる手法、神の登場によるフィクションのおもしろさ、当時としては珍しい品々を記載し読者の興味を引く等々。ストーリーはある程度パターン化されているが、内容としては変化に富んでいる。故にそこに娯楽性が浮き彫りされてくるのである。

『永代蔵』は町人西鶴が自分と同じ町人達が金儲けに専念し、結局は金に動かされ支配されている点を客観的に描いている作品なのである。しかし西鶴は彼らを否定的にみてはいないし、彼らに重々しく教訓を垂れようともしていない。読者意識の強い西鶴・楽しみながら文章を書いている西鶴にとって、読者に娯楽を提供しようという意図はあっても、教訓的意図云々に関しては全く関心外の事だったろうと推測されるのである。

〈源氏物語試論〉

——紫の上と浮舟を通して作家の意識構造の検討——

識構造の検討

第四回卒業 窪添 久恵

本論は『源氏物語』における「紫の上と浮舟を通して作家の意識構造の検討」を試みたものであり、全六章からなる計百二十枚程度のものである。

第一章は「紫のゆかりの人」として「若紫」の巻から登場する紫の上の位置・出家の姿勢を中心に述べた。第二章では中君の「肩代

り」として「宿木」の巻から登場する浮舟の鬻りのある運命の半生を述べた。

次に第三章では第一章と第二章とから両者の人物造型にみられる作家の方法を考察した。それは両者を愛した光源氏や薫の前史、また両者の形代としての登場や三角関係とかライバル関係の使用にみられる同型パターンの多出性。さらに両者の愛の様相の相違にもかかわらず、ひたむきに出家を志す物語での状況設定。そこでは作家の「女」の生そのものへの執拗な問いかけを感じ、人生に於いての根源的、不変的な実態を探索するため、一事象を多面的に語りかけ、それ故、読者に客観性を信じさせるといふ方法を見いだした。

さらに第四章では、両者の人物造型で多くの語を費されて語られる出家への姿勢を問うたのである。在家信者としての全てをなす紫の上と、現世利益の観音信仰を拒否してまで出家を遂行する浮舟という、両者の「女」としての生き方を本文から考証した。さらに、その出家への姿勢を、同時代の信仰のあり方が述べてある『日本霊異記』と『往生要集』とから本文以外での比較を試み、出家への志向のひたむきさをそれぞれの立場で把握した。ただこの章は仏教に精通していない私としては不十分極らない章である。

次に第五章は、紫の上と浮舟の呼称の検討で、男・女の間に距離間のある時称せられる「女君」と、男・女の世界において称せられる「女」の使用回数から、より「女君」として生き抜いた紫の上と、女の〈業〉を背負い続けた「女」浮舟との女性像を抽出した。さらには、両者をこのようにしか生かめなかつた物語作家の厳しい物に透徹した意識を見いだしたのである。

最後に、第六章で、『源氏物語』と作家との交渉で、人生での種

種の体験から世を極めつくし、〈女〉を熟知した作家を想定する事が出来ると思われたのである。それ故、様な女性との比較の果にその優秀さや理想性が語られた「女君」紫の上を描き上げたとき、「おれおれし」き人となり、愛欲の世界をさまよい投身自殺によつてしか救いを見いだし得なかつた「女」そのものの浮舟を描くことの意味が浮かびあがつて来ると考察したのである。そのことは第三章で述べた作家の方法ゆえに紫の上を描ききつても、作家はなおも「女」を語りつくせないと思つていたと思われるのである。つまり作家の意識構造の上では、一つの理想性を荷なわされた紫の上の人物造型があるがゆえ、女の弱さ、もろさしか演じてないような浮舟の人物造型がある意味が明確になるといふことなのである。以上の事から、全篇を通して、同一作家の手による作品の成立が考えうるのである。巻巻の成立論の観点からは再検討すべき論ではある。

／＼堀辰雄論——Poet-philosopherの遍歴——

第四回卒業 島崎 紀素子

最近、中也の詩集を読んでいて、次のような詩に出会つた。

器うつわの中の水が揺れないやうに、
器を持ち運ぶことは大切なのだ。

さうでさへあるならば

モーシヨンは大きい程いい。

しかしさうするために、

もはや工夫くふうを凝らす余地もないなら……

心よ、

謙抑にして神恵を待てよ。

この詩は、私に卒論を思い出させる。

(「独語」)

「羞恥」のある文学に行きつまりを、それゆえ「羞恥」を否定する文学に「快適」を見出そうとし、表側で新しい文学の可能性を求めつつ、裏側では、常にその方法を快適な生活に密着させて綴る、そういう堀辰雄という作家の計算された人生の遍歴が、この詩を読むと全くシンメトリカルなものに思われるからである。

中也も堀も「驢馬」の、そして「四季」の同人で、同じくモダニズムの旗手たちであつた。が、彼らは新しい文学の可能性を信ずることでは肩を組み合つても、その文学が何であるかを考えた時、いつも孤立してゐた。彼らの方法はいつも異つていたからである。

堀は「快適」という大前提、——いやこれは神恵であるかも知れない——に忠実で、それを求めてあらゆる影響を自らの器に盛り、そして更にそれを消化する。飲みつくす。ジイドの「女の学校」は、日本の近代においては「かげろふの日記」となつて花ひらくはずではないだろうか。堀の器には、水は常にこぼれる程はない。神恵を待つまでもなくモーシヨンは思いのままであろう。が、これを中也の側からみるならば、満水の器を運ぶという危機に無知であると言えよう。文学というものが、人間に於ける普遍性の追求だとするならば、どちらを取るかと考える必要はない。作家を位置づけるという必要性を私は認めたくない。

堀辰雄という作家は、高原の乾いた空気の中でのみ生き続けたやうに思われている。いや、彼の文学はその中で(以下36ページへ)